View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

島根県立大学出雲キャンパス
紀要　第７巻，33-42，2012

精神疾患患者による朝顔栽培への参加継続要因の検討

松谷ひろみ・石橋　照子・藤井　明美
神門　卓巳*・宮廻　克己*・姫宮　雅美*
高橋　弥生**・日野恵美子**・稲田　順子**
妹尾紀美子**・竹下　裕子**

概　　要

精神科病院に入院中の精神疾患患者38名を対象に，フェイススケールを用いて園芸作業による気分の変化の調査，および参加観察を行った。園芸作業への参加継続群と非継続群を比較した結果，継続群は“園芸作業が気分の安定に効果的な群”，非継続群が“園芸作業が気分の安定に効果的でない群”であることが明らかとなった。継続群，非継続群の結果より，朝顔栽培への参加が継続できない要因は，精神症状が安定していないことが考えられた。また，参加継続要因は，精神症状が安定していること，朝顔の成長を予期できること，やりがいを見いだせること，他者との集団行動がとれること，前年度から継続して参加していることの5点であると考えられた。

キーワード：朝顔栽培，精神疾患患者，フェイススケール，参加継続要因

Ⅰ．はじめに

多くの人は，植物に触れることで，癒しや気持ちよさ，うれしさ，楽しさなどを感じた経験があるのではないだろうか。園芸（ガーデニング）には，体を動かすことから身体の健康に良いこと，気分が爽快になること，生産の喜びが自信を生み，意欲をもたらすことなど様々な効果があることが昔から知られている（松尾，2009）。また，近年はガーデニングブームなどにより園芸に関心が高まってきており，一般家庭にも園芸が普及し始めている。また，園芸による効果は医療福祉分野でも注目されており，施設入所高齢者，精神疾患患者，アルコール依存症患者などへの園芸の効果も検証されてきている（杉原，2006；吉本，1999；堀江，2004；山川，2006；川村，2012；恵紙，2002）。

和田は，園芸作業が精神疾患患者に与える効果の検証として，フェイススケールによる園芸作業前後の気分の変化を調査し，短時間の園芸作業を通じて対象者がリラックス効果を得ていたと報告している（和田，2011）。和田による研究は園芸作業の作業単位の効果の検証であったため，園芸作業を通して参加の継続につながっているのか，何が参加を継続させる要因であるのかまでは検討されていなかった。また，先行研究を概観しても，精神疾患患者の園芸作業などへの参加継続の要因を明らかにした研究はほとんど見当たらなかった。

そのため，本研究では，病棟活動として行われている朝顔栽培に参加する精神疾患患者個々の変化を追い，継続して参加できる群と継続して参加できない群を比較して群間の違いを明らかにし，参加継続要因について検討していきたい。

なお，朝顔栽培は，治療を目的とした園芸療法としてではなく，看護職者が行う生活支援の一環として展開されているものとする。

* 島根県農業技術センター
** 島根県立こころの医療センター

Ⅱ．目　　的

朝顔栽培に参加する精神疾患患者個々の変化を追い，継続して参加できる群と継続して参加できない群を比較して群間の違いを明らかすること，また参加を継続させる要因について検討することを目的とする。

Ⅲ．研究方法

１．調査対象

精神科病院に入院中の精神疾患患者で，調査の主旨，方法等について説明し，同意の得られた者 38 名を対象とした。

２．調査方法

１）調査期間

平成 24 年 5 月～ 8 月

２）朝顔栽培の概要

本調査における朝顔栽培の作業は,『種まき』,『鉢上げ』,『つる巻き』,『種とり』,『収穫祭』の 5 工程に分かれている。また，今回は自分が育てた朝顔を他者に鑑賞してもらうことや，朝顔に囲まれた中で他患者と共に楽しい時間を共有することも，朝顔栽培に関連し，気分の変化に影響すると考え,『朝顔祭』を工程の一つに加えている（表１）。今回は朝顔祭までの結果について検証した。

３．調査内容

１）対象者の属性・背景の調査

基本的な属性として，性別，年齢をフェイススケールの調査票へ記入してもらった。また，対象者の前年度の病棟での朝顔栽培への参加状況（参加の有無，参加回数）および，対象者のうち，参加回数の少なかった者の中断理由・転帰について，病棟研究者より情報を得た。

２）フェイススケールを用いた気分の調査

朝顔栽培に参加することにより，気分の安定が得られたのか把握するため，朝顔栽培の作業時に，Wong-Baker Faces Rating Scale（Wong & Baker，1988）を参考にした 5 段階（わるい（1 点）～よい（5 点））のフェイススケール（図１）を使用し，朝顔栽培の作業に参加する前の気分と参加した後の気分に近い顔をそれぞれ１つずつ対象者が選択した。

なお，フェイススケールは疼痛の程度を示すものとして多くの研究において使用されているが，言語的な表出が難しい精神疾患患者に対してビジュアルアナログスケールを用いて精神症状・気分を測定し妥当性が検証されているため

表１　園芸作業プログラムの内容

	プログラム内容	詳細
5 月	種まき	ポリポットへ土を入れ，昨年度採取したアサガオの種をまく。
6 月	鉢上げ	発芽した苗を，土を入れておいた鉢へ移す。 １人１鉢作成し，自分の鉢に名前を書く。
7 月	つる巻き	自分の鉢の伸びた苗のつるを支柱に巻く。
8 月	朝顔祭	病棟内で朝顔の鑑賞会とレクリエーションをしながら，アサガオが咲いたことの喜びを他患者と共有する。
	※毎日の水やりは対象者及び病棟スタッフが実施する。	

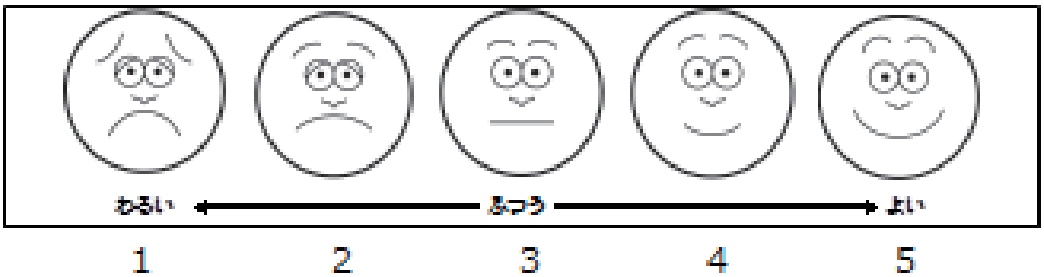

図１　フェイススケール

（佐藤，2002；山下，2008），患者が気分を表出するための補助的な手段として活用できる。

３）朝顔栽培の作業後の感想

フェイススケールによる気分の調査に併せ，対象者の感想や思い，朝顔栽培に対する意見等について収集した。方法は，調査用紙記述欄への自由記載とした。

４）参与観察方法

朝顔栽培の作業の際，対象者を集め，専門農業普及員である共同研究者が作業方法を説明し，共同研究者および病棟スタッフが，対象者の朝顔栽培を支援しながら，対象者の行動，表情，発言などを観察し，書き留めた。

４．分析方法

１）フェイススケール値の分析

４回の作業に３回以上参加し調査に応じてくれた群を継続群（以下，継続群），２回以下参加し調査に応じてくれた群を非継続群（以下，非継続群）とし，各群の作業前後のフェイススケール値の差を Wilcoxon の符号付き順位検定により分析し，群間の比較を行った。統計処理には統計ソフト SPSS20.0 for Windows を用い，統計上の有意水準は危険率 5% 未満とした。

２）感想および参加観察記録内容の分析

朝顔栽培の作業後の感想および参加観察記録内容について継続群，非継続群に分類し，KJ 法のスタイルを用いた質的帰納的分析を行った。以下に分析を進めたステップを説明する。

(1) データの単位化

朝顔栽培の作業後の感想および参加観察記録内容について継続群，非継続群に分類したものを，朝顔栽培への参加の継続に影響する感情・感覚が現れている部分を一文もしくは一義単位でカード化した。

(2) データの統合化

すべてのカードを共同研究者に等分に配分し，１枚ずつ読み上げながらメンバーの合意の元に，データが主張する内容の「類似性」に着目し，カードを集めてグループ化していった。丁寧に分析する目的で，カード枚数は３枚までを基準とし，多くても４～５枚まででグループを作るようにした。それぞれのグループの内容を表す一文を考え「表札」として記述した。

すべてのカードをグループ化し「表札」をつけた後，さらにグループ化を進め，統合できたグループにはカテゴリー名をつけていった。

実際に生成したカテゴリーを例として図２に示す。カード内容を“　”，表札内容を〈　〉，カテゴリー名を【　】で表している。

まず，“花が咲いてひらくことがたのしみ”“花がさきそうで楽しみ”“楽しみができた”“朝顔が楽しみです”“このつぼみはいつ咲きますか”“作業後もつぼみをながめる”というカードを同じグループにした。これらのカードは，種まきや鉢上げなどの作業を通して，これから咲くであろう朝顔を想像しながら，朝顔の開花を楽しみに感じていることを意味しており，〈開花を楽しみにする〉と表札をつけた。

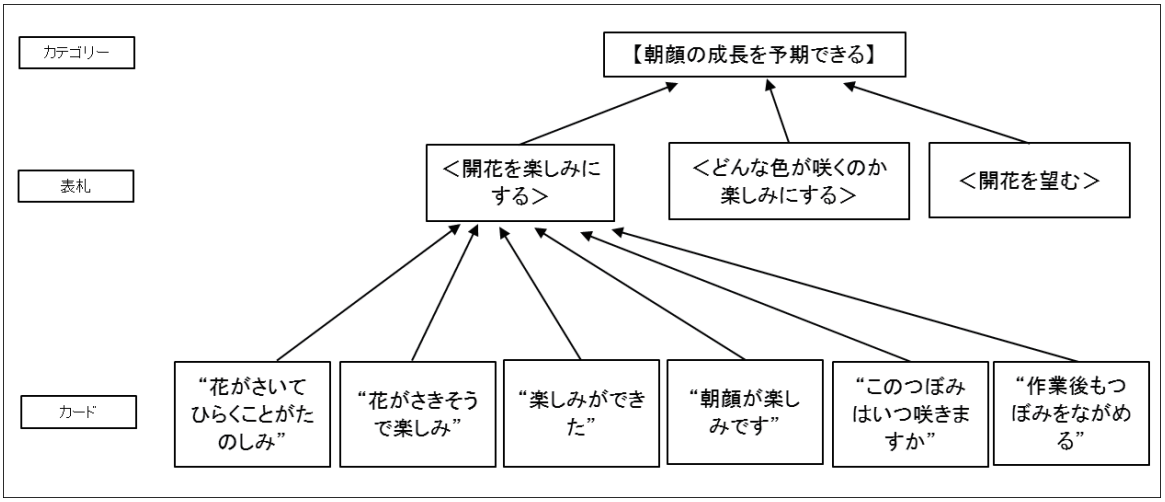

図２　データの結合化の例

次に，〈開花を楽しみにする〉〈どんな色が咲くのか楽しみにする〉〈開花を望む〉の表札を同じカテゴリーにした。これらの表札は，開花した朝顔やその色が想像できることや，花を咲かせたいという思いが，今後どのように朝顔が成長し開花していくのか予期することができているということを表しており，【朝顔の成長を予期できる】と表札をつけた。

５．倫理的配慮

本研究に取り組むにあたって，島根県立大学出雲キャンパス研究倫理審査委員会で承認を得た後，精神科病院病院長，対象病棟看護師長に研究の趣旨を口頭にて説明し承諾を得た。対象者個人に対しては調査への参加は自由意思であり，調査協力が得られないことで不利益をうけることはないこと，得られたデータは個人名が明らかにされることのないよう厳密に処理し研究目的以外での使用はないこと，研究結果を専門の学会・雑誌にて公表することがあるが個人名は特定できないように処理すること，研究協力に同意した後でも辞退可能であることを紙面および口頭により説明し，署名による同意を得た。

また，対象者には精神症状の落ち着いている患者を選定し，本人，主治医，病棟看護師長の許可を得て調査を行うが，毎回の朝顔栽培の作業において，対象者のそのときの気分や状態により，朝顔栽培の作業に参加しない，作業途中で帰ってしまう，作業は参加してもアンケートには回答しないという行動があったため，その都度対象者へ意思確認を行いながら参加の自由を保証した。

Ⅳ．結　　果

１．継続群と非継続群の属性・背景

本研究における，継続群と非継続群の属性は表２のとおりであった。平均年齢は，継続群が54.1 歳 ± 16.25（範囲 22 ～ 77 歳），非継続群は56.8 歳 ± 11.92（範囲 32 ～ 76 歳）であり，継続群の方が最低年齢が低かった。性別は継続群が男性 11 名（68.8％），女性５名（31.2％），非継続群では男性13名(59.1％)，女性９名(40.9％)であった。前年度の園芸作業への参加の有無は，継続群で参加ありが 13 名（81.2％），参加なしが３名（18.8％），非継続群では参加あり，参加なしともに 11 名（50.0％）であり，継続群の方が，前年度から継続して参加した者の割合が高かった。

非継続群に属した者が，継続して参加できなかった理由として一番多かったのが精神症状あり（40.9％）で，次いで転棟･理由不明（13.6％）であった。転棟，退院，他の都合あり，死亡の７名（31.8％）については，非継続はやむを得ない者であった（表３）。

２．継続群と非継続群の気分の変化と群間比較

継続群，非継続群に分け，それぞれの作業における気分の変化について分析を行った。その結果，継続群では，各回の朝顔栽培において作業前後のフェイススケールの中央値を比較した結果（表４），有意差が認められた。また，つる巻きを除き，回数を重ねるごとにフェイススケールの平均値は高くなっていた。

一方，非継続群では，各回の朝顔栽培において作業前後のフェイススケールの中央値の有意差は認められなかった。4 回を通した変化を見ても，つる巻きを除きフェイススケールの平均値はほぼ横ばいであった。なお，つる巻き作業では，継続群よりも非継続群のフェイススケールの平均値が高くなっていた。

３．朝顔栽培への参加の継続に影響する感情・感覚

朝顔栽培の作業後の感想および参加観察記録内容より，継続群からのカードは 41 枚，非継続群からのカードは 24 枚抽出できた。

継続群の 41 枚のカードは，22 のグループに集約でき，最終的に 12 つのカテゴリーに集約できた。また，非継続群の 24 枚のカードは，12 のグループに集約でき，最終的に９つのカテゴリーに集約できた。以下，表札内容は〈〉，カテゴリー名は【　】を用いて表す（表５，６）。

１）継続群から抽出できた継続に影響する感情･感覚のカテゴリー

継続群の参加者は，朝顔栽培を通して，〈どんな色が咲くのか楽しみにする〉〈開花を楽しみにする〉〈開花を望む〉といった【朝顔の成

表２　継続群と非継続群の属性

	継続群 n=16	非継続群 n=22
平均年齢	54.1歳±16.25	56.8歳±11.92
性別		
男性	11（68.8%）	13（59.1%）
女性	5（31.2%）	9（40.9%）
前年度参加の有無		
参加あり	13（81.2%）	11（50.0%）
参加なし	3（18.8%）	11（50.0%）

表３　非継続群の継続できなかった理由

継続できなかった理由	人数 n=22
精神症状あり	11（50.0%）
転棟	3（13.7%）
退院	2（ 9.1%）
他の都合あり	1（ 4.5%）
死亡	1（ 4.5%）
拒否	1（ 4.5%）
理由不明	3（13.7%）

表４　継続群・非継続群のフェイススケール値の変化

	作業内容	作業前			作業後			p値
		中央値	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	
継続群	①種まき(n=15)	3.00	3.07	1.10	5.00	4.33	0.90	.004**
	②鉢上げ(n=16)	3.00	3.63	0.96	5.00	4.56	0.727	.007**
	③つる巻き(n=12)	3.00	2.83	1.27	3.50	3.67	1.23	.015*
	④朝顔祭(n=12)	3.00	3.67	1.23	5.00	4.67	0.65	.024*
非継続群	①種まき(n=8)	3.00	3.50	1.07	3.50	3.88	0.99	.461
	②鉢上げ(n=6)	3.00	2.83	1.33	4.00	3.83	1.33	.257
	③つる巻き(n=4)	3.00	3.50	1.00	5.00	4.50	1.00	.157
	④朝顔祭(n=11)	3.00	3.18	1.60	4.00	3.82	0.87	.157

・p＜0.01＊＊　p＜0.05＊　Wilcoxon符号付順位検定
・平均値および標準偏差は参考値

長を予期できる】ことや，〈作業をすることの持ちよさを実感する〉〈自然に触れることの気持ちよさを実感する〉〈野外の気持ちよさを実感する〉といった【気持ちよさの実感】，〈おもしろさを実感する〉といった【おもしろさの実感】，〈新しい作業をしたことへのうれしさを感じる〉といった【新しい作業への喜び】，〈作業が無事終わったことに安堵する〉といった【安堵感】を抱くとともに，〈気分は普通で身体のみに疲労を感じる〉〈暑さを感じる〉という【身体への負荷】を感じていた。

また，朝顔栽培は〈作業をやりとげ気持ちが充実する〉〈次の作業に関心を向ける〉といった【やりがいを見いだす】ことや，〈自分の力に気づく〉〈集団の力に気づく〉〈作業ができる体力に気づく〉といった自分と他者の【できる力の認識】をする機会となっていた。そして，朝顔祭では，〈花がさいたことへのうれしさを感じる〉といった【開花への喜び】，〈他者と場を共有することのよさを感じる〉といった【他者と場を共有する喜び】を感じることで，〈次の活動を期待する〉といった【次の活動への期待】，〈他者へ感謝する〉〈他者を評価する〉〈他者の作業が終わるまで待つ〉といった【他者への思いやり】を抱くことができていた。

２）非継続群から抽出できた継続に影響する感情・感覚のカテゴリー

非継続群も継続群と同じく，朝顔栽培を通して，〈開花を楽しみにする〉といった【朝顔の成長を予期できる】ことや，〈作業をすることの楽しさを実感する〉といった【楽しさの実感】，〈野外の気持ちよさを実感する〉といった【気持ちよさの実感】を抱きながら，〈心身に疲労を感じる〉といった【心身への負担】，〈作業をやりとげ気持ちが充実する〉といった【やりがいを見いだす】を感じていた。

朝顔祭では，〈祭りへ参加してよかったと感じる〉〈花をみてよかったと感じる〉〈全体が終

表５　継続群から抽出できた継続に影響する感情・感覚のカテゴリー

カテゴリー	表　　札
朝顔の成長を予期できる	どんな色が咲くのか楽しみにする
	開花を楽しみにする
	開花を望む
気持ちよさの実感	作業をすることの持ちよさを実感する
	自然に触れることの気持ちよさを実感する
	野外の気持ちよさを実感する
おもしろさの実感	おもしろさを実感する
新しい作業への喜び	新しい作業をしたことへのうれしさを感じる
安堵感	作業が無事終わったことに安堵する
やりがいを見いだす	作業をやりとげ気持ちが充実する
	次の作業に関心を向ける
身体への負荷	気分は普通で身体のみに疲労を感じる
	暑さを感じる
できる力の認識	自分の力に気づく
	集団の力に気づく
	作業ができる体力に気づく
開花への喜び	花がさいたことへのうれしさを感じる
他者と場を共有する喜び	他者と場を共有することのよさを感じる
次の活動への期待	次の活動を期待する
他者への思いやり	他者へ感謝する
	他者を評価する
	他者の作業が終わるまで待つ

表６　非継続群から抽出できた継続に影響する感情・感覚のカテゴリー

カテゴリー	表　　札
朝顔の成長を予期できる	開花を楽しみにする
楽しさの実感	作業をすることの楽しさを実感する
気持ちよさの実感	野外の気持ちよさを実感する
やりがいを見いだす	作業をやりとげ気持ちが充実する
心身への負担	心身に疲労を感じる
満足感	祭りへ参加してよかったと感じる
	花をみてよかったと感じる
	全体が終わったことに満足する
他者と場を共有する喜び	他者と場を共有することのよさを感じる
不快感	アンケートを不快に感じる
精神症状の不安定さ	妄想などにより気分が落ち着かない
	作業へ関心か向かない

わったことに満足する〉といった【満足感】,〈他者と場を共有することのよさ感じる〉といった【他者と場を共有する喜び】を感じていた。一部に〈アンケートを不快に感じる〉ことで【不快感】を持った者もいた。また,〈妄想などにより気分が落ち着かない〉〈作業に関心が向かない〉といった【精神症状の不安定さ】が認められた者がいた。

3）朝顔栽培への参加の継続に影響する感情・刺激

継続群と非継続群のカテゴリーを比較すると,【朝顔の成長を予期できる】【気持ちよさの実感】【やりがいを見いだす】【他者と喜びを共有する】の4カテゴリーが共通していた。

各群で特徴的なカテゴリーとしては，継続群では【おもしろさの実感】【新しい作業への喜び】【安堵感】【身体への負荷】【できる力の認識】【開花への喜び】【次の活動への期待】【他者への思いやり】であり,非継続群では,【楽しさの実感】【心身への負担】【不快感】【精神症状の不安定さ】であった。

V．考　　察

朝顔栽培への参加継続群と非継続群の作業前後のフェイススケール値を比較した結果，継続群のみにフェイススケール値に有意な差が認められたことから，継続群は朝顔栽培に参加することによりリラックス効果（以下，リラックス効果が得られたことを気分の安定と表す。）が得られていたことが分かる。すなわち，継続群は“朝顔栽培が気分の安定に効果的な群”，一方で非継続群は“朝顔栽培が気分の安定に効果的でない群”であると言うことができる。このことより,朝顔栽培へ継続して参加することが,精神疾患患者の気分の安定に効果を与えやすいと考えられた。

非継続群の特徴として，大半の者は精神症状が出現したために,作業参加中も落ち着かない,独語が活発,頻回の確認行為があるといった【精神症状の不安定さ】が認められ，作業に参加できなかったということが挙げられる。精神症状が出現している場合，幻覚妄想，病的体験による極度の緊張や周囲への不信感といった症状,感情の鈍麻，意欲や自発性の低下，自閉などの陰性症状があると考えられ，精神症状が出現している中で朝顔栽培の作業を行っても，緊張や感情の鈍麻などから参加の継続も難しくなると考えられる。このことから，参加が継続できない要因には，精神症状が安定していないことがあると考えられた。

継続群の結果から，朝顔栽培の参加継続要因は以下の5点であると考えられた。

まず，1点目は，精神症状が安定している者であるという点である。非継続群の多くは精神症状が出現したため参加の継続が難しかった一方で，継続群は，比較的精神症状の安定が図られているため，朝顔栽培により気分の安定は得られやすく，参加の継続が可能であったと考えられる。

2点目として，朝顔の成長を予期できるという点である。継続群の多くの者と非継続群の一部の者は，朝顔栽培の過程において,「いつ花が咲くだろうか」「今年の朝顔は，どんな色の花が咲くだろう」という成長への期待を抱きながら，種から芽が出て，葉が開き，花が咲くまでの【朝顔の成長を予期できる】ために，先の見通しを持つことができていた。見通しが持てることは，楽しみに待つ気持ちを芽生えさせるとともに，“今”行っている作業が朝顔の開花につながっていると想像できることで朝顔栽培に意味を見いだすことができ，継続した参加につながったと考えられる。

3点目には，やりがいを見いだせるという点である。吉本は，園芸は1回の作業を終え，そこでまずは一段落すること，そして植物の成長を待ち，成長して再び関わる，という様に一つの作業目標を終える度に，十分な達成感が得られやすい（吉本，2000）と報告している。種まきや鉢上げ，つる巻きのそれぞれの作業を終了した時点で，対象者は達成感や充実感を得て,朝顔栽培に【やりがいを見いだす】ことができたと考えられる。そういった1回1回の作業の中で，やりがいを見いだせることは，作業をやり遂げた後の安堵感などにより気分の安定につながるとともに，次の作業に継続して参加する意欲にもつながったと考えられる。

4点目としては，他者との集団行動がとれるという点である。共同作業の中から共通の話題が生まれるとともに，体験を共有することで連帯意識を持つことなどから集団交流が促進され，また，周りの人との連帯感が，孤立感を開放するきっかけにもなるといわれている(吉村，2000)。さらには，園芸作業を通して社会技能が改善することが明らかとなっており（山川，2006)，本研究においても，朝顔栽培を通して，集団行動をする中で，順番に行う作業では前の人の作業が終わるまで待ったり，互いの鉢の成長を評価し合ったりと，対象者自身にとって社会性を養う場にもなっていた。朝顔が他者との会話の媒体になり共通の話題ができたり，同じ空間で作業した対象者同士に仲間意識が芽生えたりしたことで，集団交流が進み，集団行動に必要となる【他者を思いやる】【他者と喜びを共有する】ことができるようになったと考えられる。また，集団行動をとる中で，孤独感を和らげ安心感を得ていたと推察でき，それが継続した参加につながったと考えられる。

5点目として，前年度から継続して参加していることも要因の一つと考えられた。園芸作業プログラム自体は前年度のプログラムと変更はなく，継続群の8割は前年度の朝顔栽培の参加者であった。人は自然に親しむことで五官の働きがよくなることを体験している（恵紙，2002）ことからも，前年度の朝顔栽培を通して対象者は五官の働きが改善したことを体験していると考えられる。また，対象者の作業の際の手際の良さからも，実際に行う作業を前年度の参加した状況から予測することが出来たため，安心して作業に参加でき，継続した参加にもつながりやすかったと考えられる。

精神疾患患者が，朝顔栽培などの園芸作業に継続して参加できるようにするために看護職者に求められる関わりとして，まず精神症状の不安定さを緩和させるような支援が重要である。作業時には精神症状が安定しない対象者へは看護職者が1対1で関わり，相手のペースに合わせながら作業の支援をしていく必要があるだろう。川村らによって，精神科看護師の園芸活動を通した関わりの中に，精神症状によらない快感情を引き出すという関わりがあることが明らかにされている（川村，2012)。病状から意識をそらせて現実に引き戻す，病棟内での生活では得られにくい喜びや楽しさ，気持ちよさなどの感情を引き出す関わりをすることで，精神症状を和らげていくことが出来ると考えられる。
また，参加継続要因にあったように，「何色の花がさきますかね？」「いつごろ咲きますかね？」といった，成長を予測させるような言葉かけをするなど，先の見通しが出来るような支援や，参加者が安心して朝顔の成長を見守ることが出来るよう，成長の過程や朝顔に関する専門的な情報を対象者に提供していく必要がある。

また，継続群については，参加継続要因として考えられた5点を意識し，それらを強調できるような関わりを持つことで，より効果が得られやすくなるであろう。

吉村は，植物自体が持つ心理・身体的なリラクセーション効果に，気分転換の要素が加わり，相乗的にストレス低減が図られ，病状安定に役立つだろうと述べている（吉本，1999)。精神疾患患者が作業に参加することで，症状の安定につながるということも念頭に置きながら，継続した参加ができるように看護職者が上記のような支援をしていく必要がある。参加継続要因を理解しておくことで，対象者への関わり方について注意し，工夫することが出来ると考えられる。

本研究の限界と課題として，気分の変化の調査は，調査の簡略化から作業後に作業前・作業後の気分をまとめて調査しており，調査前の気分が調査中の気分に影響を受けるなど，必ずしもそのときの気分を示すことができていなかったかもしれない。気分の変化の調査票についても，字が見えにくく気分が悪くなったという対象者もいたことから，調査方法や調査票の内容，研究者による支援などについて検討が必要である。

今回は，対象者がどういった疾患を持ち，どの程度の期間入院しているかで違いがあるのか，個人的な背景がもたらす影響まで考察することができなかった。また，測定スケールとして主観的な改善度のみを比較対象としており，標準化された評価尺度を用いての客観的な視点が不足している。今後は，主観的・客観的双方

の評価尺度を用いて，多角的な調査を実施していく必要がある。

今回の調査では，園芸作業を通して，【できる力を認識する】ことができている対象者もおり，朝顔栽培などの園芸作業が，自分の持っている力に気づき，自らの力を引き出せるというセルフエンパワーメントへ活用できる可能性も示唆された。

Ⅵ. 結　　論

本研究により，園芸作業への参加の継続群と非継続群を比較した結果，継続群は“園芸作業が気分の安定に効果的な群”，非継続群が“園芸作業が気分の安定に効果的でない群”であることが明らかとなった。継続群，非継続群の結果より，朝顔栽培への参加が継続できない要因は，精神症状が安定していないことが考えられた。また，参加継続要因は，精神症状が安定していること，朝顔の成長を予期できること，やりがいを見いだせること，他者との集団行動がとれること，前年度から継続して参加していることの５点であると考えられた。

謝　　辞

本研究にご協力いただいた患者の皆様，調査の場を与えてくださった病院の院長，看護局長，スタッフの皆様方に深く感謝いたします。

文　　献

恵紙英昭，北夫伸子，田中順二，他（2002）；長期入院中のアルコール依存症に対する園芸療法の心理的効果 - 第一報 -，久留米大学大学院心理学研究科，1，53-60.

堀江昌美，岩満優美，北村径子，他（2004）；園芸療法が精神疾患患者に与える心理的及び生理的効果の検討，精神科治療学，19(5)，643-649.

川村晃右，滝本浩子，南村涼子，他（2012）；精神科看護師の園芸活動を通した患者への関わり方，日本看護学会論文集（精神看護），42，71-74.

松尾英輔（2009）；人と植物とのかかわりを探る（5），農業および園芸，84（4），458-463.

佐藤心子，菊池ヨシ子，中村令子（2002）；フェイススケールを用いた気分の測定 - 抑うつ状態の患者理解に向けて -，日本看護学会論文集（成人看護Ⅱ），33，374-376.

杉原式穂，青山宏，杉本光公，他（2006）；園芸療法が施設高齢者の精神面，認知面および免疫機能に与える効果，老年精神医学雑誌，17（9），967-975.

和田由佳，石橋照子，神門卓巳，他（2011）；精神科病院における朝顔栽培の取り組みとその効果，島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要，6，33-4.

Wong，D.　& Baker，C.；Pain in children comparison of assessment scale，Pediatric Nursing，14（1），9-17，1988.

山川百合子，小松崎将一，井上栄一，他（2006）；精神科デイケアにおける園芸療法の心理的効果の検討～地域リハビリテーションと農学の連携～，茨城県立医学雑誌，24（2），39-47.

山下瞳，寺尾岳，溝上義則（2008）；単回の精神科作業療法が精神症状に与える影響；Visual Analogue Scale を用いた検討，九州神経精神医学，54（3 ～ 4），173-177.

吉本雅彦（2000）；メンタルヘルスに役立つ園芸療法の実践プログラムについて，公衆衛生研究，49（3），284-287.

吉本雅彦，波多野敏子，嶌紗穂美（1999）；園芸療法の保健所デイケア適用にみる効果，保健の科学，41（2），143-148.

Examination of Participation Continuance Factor to Morning-glory Cultivation by Patients with Psychiatric Disorders

Hiromi MATSUTANI, Teruko ISHIBASHI, Akemi HUJII,
Takumi KANDO*, Katsumi MIYAZAKO*, Masami HIMEMIYA*,
Yayoi TAKAHASHI**, Emiko HINO**, Junko INATA**,
Kimiko SENOO** and Yuko TAKESHITA**

Key Words and Phrases : horticultural activities,
patients with psychiatric disorders,
face scale, participation continuance factor

---

* Shimane Prefectural Agricultural Technology Center
** Shimane Prefectural Psychiatric Medical Center